

Quality of Science

池 田 隆 幸 (藤女子大学 QOL 研究所長)

2014年1月、NatureにSTAP細胞(刺激惹起性多能性獲得細胞 Stimulus-Triggered Acquisition of Pluripotency cells)が、動物の体細胞に外的刺激(ストレス)を与えて分化多能性獲得させた細胞としてに発表された。早速私も論文を取り寄せてみた。Nature Articleとして7ページの本文と11ページの方法からなる大論文でカラーもふんだんに使われている。Natureとしては非常に珍しい扱いで、その論文のトピック性の高さをうかがわせた。私などは、その分量の多さと、何よりも単に酸性にするという刺激だけでどのような細胞にも生まれ変われる性質を獲得した実験結果にただただ驚くばかりだった。もちろん、生命科学の常識を覆す実験結果であり、論文を最初に提出したときには、細胞生物学の歴史を愚弄しているとまで言われ却下されたという。その興奮も覚めやらぬうちに、その筆頭著者である小保方博士個人が脚光を浴び、週刊誌やテレビなどでリケジョとして紹介されるようになった。この時点で、かなりの研究者、特に女性研究者は違和感を覚えてきたのではないだろうか。

研究者は、その研究に対する信念と熱意、緻密なデータと鋭い観察力、深い洞察力とによって評価され、決してジェンダーやましてや割烹着とかを評価されるべきではないが、余りのマスコミのフィーバーには開いた口がふさがらなかった。しかし、この発見そのものは、もし本当であれば科学的にも金銭的にもノーベルのダイナマイトに匹敵する、文字通りノーベル賞級の発見であることは疑いようもなかった。しかし、その後数々の杜撰と評されたデータの扱いから、博士論文の偽造問題などがわき起こり、理化学研究所では調査委員会が立ち上がって調査段階となっているが、STAP細胞の真偽のほどはまだ先延ばしとなっている。一見すると、サイエンスというクリアな世界ではなく、人間模様が渦巻く魑魅魍魎の世界が広がっており、世の中の研究者達は辟易しているのではなかろうか。まさに、日本の科学の質(Quality of Science)が問われているが、少なくとも日本の輝かしい科学史の中の重大な汚点の1つとして記憶されることになるだろう。

さて、今年も藤女子大学 QOL 研究所の紀要をお届けできました。Natureとは比べようもありませんが、本学を初めとする教員、研究者達の日頃の真摯な視線を感じ取れる論文集となっております。ここに掲載された方々の今後ますますの研究の発展を祈念して巻頭言とさせていただきます。